

### J.S.バッハ(D.ラッセル編):目覚めよと呼ぶ声あり

J.S.バッハの弟子ヨハン・ゲオルク・シュープラーによって出版された《シュープラー・コラール集》の第1曲で、カンタータ第140番(1731)の第4曲が原曲。聖トーマス・カントールの職にあったライプツィヒ時代の作とされ、前奏のメロディがとくに有名。編曲は、現代イギリスの名ギタリスト、デイヴィッド・ラッセルによる。

### タンスマン:ギターのためのインヴェンション《バッハ讃歌》

アレクサンデル・タンスマンはポーランド出身の作曲家。第一次世界大戦後にパリに移住し、フランスに帰化した。その長い生涯において、幅広いジャンルに膨大な作品を遺したが、クラシック・ギターの名手アンドレス・セゴビアとの交流から生まれた数多くのギター作品がよく知られている。バッハへのオマージュとして1967年に書かれた本曲は、それぞれ2〜3分程度の短い5曲からなり、バッハへの深い敬意が感じられる。

### J.S.バッハ:前奏曲、フーガとアレグロ

1740〜45年頃の作で、当代随一のリュート奏者であったシルヴィウス・レオポルト・ヴァイスとの親交から生まれた。プレリュード(前奏曲)、フーガ、アレグロの3楽章からなり、簡素化されたソナタのような構成となっている。リュートまたはチェンバロのための曲で、低弦の動きに撥弦楽器の妙を生かした響きを聴くことができる。

### 武満 徹:フォルオス

武満のギター独奏曲としては最初のもので、1974年、ギタリスト荘村清志の委嘱によって作曲された。「フォルオ」とは英語で二つ折りの紙を指す。本曲は3つのフォルオからなり、第3曲にバッハ《マタイ受難曲》からの引用が見られる。

### J.S.バッハ:リュート組曲 第3番

バッハのリュート組曲は4曲あるが、そのうち2曲は自作の無伴奏作品をバッハ自身が編曲したもの。本作品 BWV995(ギターへの編曲はイ短調が多い)は、《無伴奏チェロ組曲 第5番》を原曲としており、編曲された時期は1730年前後とされる。フランス風序曲のプレリュードに始まり、全体的に典雅な響きを基調としているが、どこか内省的でほの暗い情熱を秘めているようにも感じられる。最後は印象的な付点リズムのジグで締めくくられる。